



11月号

ひだまり

今月のエッセー

私達のお祭り

早いもので、十一月を迎えました。街路樹が色づき、燃えるようなきれいな赤色に染まります。

そんな中で、テレビに先日(十月三十一日)の「ハロウィン」のことが報道されていました。

ハロウィンは、もともとは秋の収穫をお祝いし、悪霊などを追い出す宗教的行事で、近年日本に文化的な行事として定着しました。

私はそれを見て「日本人って本当にお祭りが好きなんだなあ」と改めて実感しました。日本古来のお祭りだけでも十から三十万件あるとインターネットのお

仏教のこぼれ

「玄関」

どの家にも玄関はあるでしょう。なければ入れませんからね。この玄関という言葉も仏教から生じた言葉です。当然、お寺にも玄関があり、山門が正式なそれに当たります。この玄関という言葉、「玄妙な道に入る関門」のことで、つまり「奥深い仏道への入口」を意味しています。お稽古事等で師匠に就くことを「入門する」と言いますよね。これももとは、門を潜って道場(寺)に入ることに由来し、道に入ることを意味しています。つまり、玄関は「あちら」と「こちら」の世界を繋ぐ場所なのです。さて、私たちの身の回りには様々



な門があります。先述したお寺の山門は勿論、神社の鳥居も門です。また、庭園やお屋敷等の門も、世界を分ける関門として、その内側を特別な空間にし立てています。それを知った上で眺めると、ささやかな構えであっても、人がその門の内側に込めた想いが窺い知られるようです。

ところで、禅は日常の「当たり前」を大切に行いなさい、それが身と心を整えるのだと説いています。玄関の奥にあるのは日常。つまり「玄妙な道」とは日常のことです。さもない日常こそが自身を整える道場なのでしょう。

◆ 田代浩潤 (たしろこうじゆん)

編集後記

紅葉のとてもきれいな季節となりましたね。皆さんはいかがお過ごしですか？

私は先日、長野県のお寺にて行われた紅葉狩りに行ってきました。といっても、大きな銀杏の木の葉はすでに一枚残らず地面に落ちてしまい、黄色い絨毯の上での食事会となりました。紅葉を眺めることはできませんでしたが、それでも地面いっぱい黄色い落ち葉はまさに壮観の一言。久しぶりに長野の澄んだ空気を感じ、充実した時間を過ごすことができました。

祥泉院さんの木々は、どんな彩を見せてくれているのでしょうか？

◆ 竹村信彦 (たけむらしんげん)

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

祭り関係のページに載っていました。

日本であれば四季がはっきりしている分、一年間を四つ分けてそれぞれの季節の特色を生かしたお祭りを行うことが出来ます。実際、そう理解はしていましたが、調べてみてここまで多いことに驚きました。

私は今までお祭りにあまり行ったことがありませんでしたが、テレビでその光景を見ると、いつも思い出される場面があります。

それは、大学生の頃でした。千葉県成田山でのお祭り。「山車」が一同に集結して成田山の坂道を登る総引きがとても勇壮で見ているだけで興奮し、印象深く記憶に残っています。

実際に「山車」を引いたわけではありません。それでも、同じ様な高揚感を味わえてお祭りとはすごい行事なんだなあと思えました。

近年お祭りは、減少傾向にあるようで、私としてはすごく寂しい気持ちになっています。

出来れば、素晴らしい文化なので残っていつて貰いたいです。 ◆ 伊藤正法 (いとうしょうほう)

法のお話



三年度
國生徹雄

『正思惟』

皆さんにとって苦しいこととはどのようなことでしょうか？

仏教では「自分の思い通りにならないこと」を「苦」と捉えています。お釈迦さまは悟りを開き、苦の原因をあきらかにし、苦を滅するための八つの実践方法を示されました。それを「八正道」といいます。そして、その中の一つが「正思惟」であり、「物事を正しく思い、考える」という意味があります。

先日、自宅で乗っている軽自動車が故障してしまいました。その車は元々妻の車で十年ぐらい大事に乗っていたのです。修理工場に見積もりを出してもらったところ、

修理代がなんと四十万円もかかるというのです。私は妻とこの車を修理するか新しい車を購入するかを話し合いました。

「十年近く乗っている軽自動車の修理に四十万円も出すのは勿体ないから、これを機に新しい車を買おう。」

と私は言ったのですが、「でも、新しい車を買ったらもつとお金がかかるし、今まで大切に買って来た車だから修理した方がいいよ。」

と妻は言います。お互いの意見がくい違い、言葉も段々と感情的になり、結局言い争いになってしまったのです。

私は、自分の意見が絶対正しいと思っているのに、その考えを理解してもらえないことに腹が立って、イライラしていました。どうしても気持ちにおさまりがつかない私は、このことを誰かに聞いてもらいたいと思い、高校生の時からの友人に電話をして、事のいきさつを聞いてもらいました。彼は仕事から帰ってきて疲れているにもかかわらず、愚痴に近いような私の話を親身になって聞いてくれたのでした。

そして、彼は私の話を聞いた後、こう

言いました。

「確かに、俺もその車の修理に四十万円も払うのは勿体ないと思うよ。だけど、奥さんが長い間大事に乗ってきて、愛着がある車なんだから、奥さんの気持ちも考えないといけないんじゃない。」

私は彼にそのように言われ、ハッとさせられました。

私は、「あの車に四十万円の修理代を払うのは勿体ない」という思いや、「新しい車に乗りたい」という思いにこだわりすぎるあまり、元々の車の持ち主である妻の気持ちを考えることが出来ていなかったことに気づかされたのです。それまでのイライラは彼の言葉で、どこかに消えてなくなりました。

感情的になり、自分の思いや考えにこだわり過ぎて、判断を誤り、人を不快にさせてしまう事があります。目前のことや自分の利益だけに捉われ狭い見方に陥ることなく、思考すること、それが「正思惟」です。そのことを気づかせてくれた彼に感謝しています。

私のお話

『かわいい甥っ子』

「ハゲおいちゃん、いつしよにあそぼー。」

粘土をこねるように私の坊主頭を触りながら、三歳になる男の子がかわいらしい声で催促してきます。私のかわいいかわい甥っ子です。私の実家では、祖父母と両親、弟夫婦と一緒に暮らしています。私自身は年に数回しか実家に帰ることはありませんが、その度に「ハゲおいちゃん」と慕ってくれる甥に会えることが何よりも楽しみなのです。

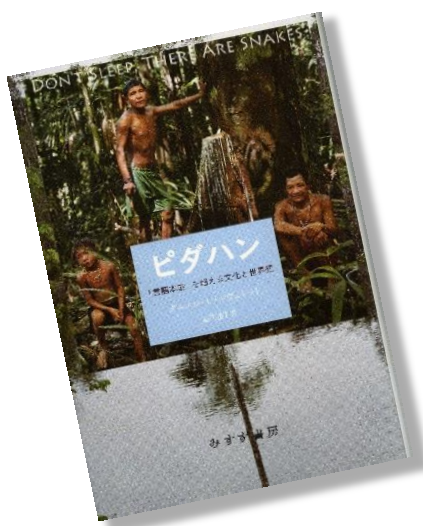
毎日会えないからこそ、私の目から見て甥は凄まじい早さで成長していきます。特に、意味は理解出来ていなくとも、その真似る力は驚嘆ものです。たとえば、私が仏壇に向かって手を合わせれば、さつきまで激しく動き回っていた甥も同じように、私の隣で静かに手を合わせます。そんな姿を見ると、可愛らしいと感じると同時に、いつの頃からかこうやって純粋に真似ることができなくなった自分をふと省みるのです。

そうやって、様々な楽しみと気づきを与える甥は、自分の子どものように大切な私のたからものです。

◆ 竹村信彦



ひだまり書房



ピダハン

～「言語本能」を超える文化と世界観～

著 ダニエル・L・エヴェレット
訳 屋代通子

本書は、ブラジルの先住民ピダハンの人々とキリスト教を布教せんとする、著者ダニエルとの長い年月に渡る物語です。

言語人類学者である著者は、キリスト教徒の一人として、聖書をピダハン語に翻訳するために伝道師兼言語学者としてピダハンの村に赴きます。ピダハンの人々と共に生活する中で、その生態や言語を研究し始めますが、ピダハンの驚くべき観念や生き方に次々と気づいていきます。

数、色、左右などの方向、神といった概念がなく、死に対する恐怖心もない。そして、生き生きと、幸せに暮らしている。科学が発展し、物が溢れ、情報が溢れている現代社会に住むことが当たり前となっている者にとっては理解し難い姿・・・

何故、ピダハンはこんなにも幸せそうなのか？

◆ 田中仁秀